立命館大学
日本文学会ニュース No. 20
「論究日本文学」第39号 付録 1976. 3

国崎望久太郎教授とその後

水田 潤

国崎望久太郎教授が停年をむかえられる。このことを契機として、私たちは一つの試練に立たされている。

立命館大学国文学科の創成が、小泉苳三先生を中心としてなされ、次代が後藤丹治先生の学風によってささえられた一時期であったことは、だれもが知っている。こんにちなお両博士の学徳は継承されつづけている。そして、昭和二十八年以降の歴史は、まぎれもなく国崎望久太郎博士を軸とした日本文学専攻であり、立命館大学日本文学会であった。博士の薫陶による俊英の輩出した時期でもあった。

本年度の「国語教育ゼミナール」の席上、私は西尾実氏の病状にふれ、国語教育界での世代の交代について語るところがあった。そのときの私の脳裏にあったのは、こんにちを予想した当惑でもあった。追憶もよし、感慨もまた一つの交響性をもつ。しかし、そのことや深刻なしかめっ面だけでは、こんにち以後の問題解決にはならない。

かつて伊藤整は、文壇棲息者の調和感覚を批判したが、いま私たちが克服しなければならないのは、それに似た生活意識ではなかろうか。国崎望久太郎先生という指導者の存在によって保証されてきた調和から自立がもとめられはしないか。学問上の問題はもとより、日常的身辺的な諸課題の解決もふくめて、先生を批評者ないしは共鳴者としてきた生活感覚からの脱皮を必要とする。もとより先生はまだまだご健康であり、学部、大学院でのご指導、学会でのご助言をご期待することができる。しかし、有限の一時期を無為にすごすことは許されない。こんにち私たちのだれもが集中的にいだいている切迫感や危機感を、どのように私たちの内部に問いかけ、可能性への転換とするか。定例の談話会での発表・討論も意義あるものにはちがいないが、そこへの定住だけでは、展望は生まれない。調和は美徳ではあっても安住でしかない。一つの笑顔、一つの握手と同時に、私たちは相互に峻烈な批判者でなければならない。新しい秩序への希求とともに、いま国崎望久太郎先生が私たちに語ろうとされることは、このことであろうと確信している。